

データの愉しみ

経済学部 准教授 直井道生なおい みちお

データが好きである。人気のない図書館の統計コーナーで、古い統計資料を探すのも好きだし、パソコンを使った統計資料の電子化といった単純作業も嫌いではない。もちろん最終的な目的は研究なのだが、時に手段が目的化し、気分転換のために特にあてもなく資料を見て回ることもある。結果として、研究室には収集した統計資料が積み上がり、ブラウザには気になったインターネット上のデータのリンクが溢れることになる。

筆者の専門は経済学の実証分析で、したがってここで言うデータは、主に統計資料や数値データということになる。そう聞くと、無味乾燥な統計資料や、単なる数字の羅列のどこがそんなに面白いのかと思うかもしれない。実証分析を行う研究者にとっては、しかし、この無味乾燥な情報が宝の山に見えてしまうのである。

大学教員にとって身近なデータといえば、自分が担当する講義の情報がある。試験を実施・採点し、学生ごとの出席やレポートの提出状況を入力すれば、それ自体が立派なデータである。普通であれば、その結果をもとに成績をつけ、学生部に提出すれば終わりである。ところが、データを目の前にするといろいろと気になってしまう。出席状況と期末試験の成績はどの程度相関しているか、学年や性別による違いはあるか、受験時の着席場所による違いはあるか等々、考え出すときりがない。

これらは、成績をつけるという本来の目的とは無関係だし、ましてや公表できる情報でもないから、実際のところはまったく何の役にも立たない。それでも、ついつい確かめてみたくなってしまいうのである。結果として、採点作業に思ったより時間がかかってしまい、この原稿も、本来の締め切りを過ぎて書くことになってしまっている。



談話室

教員によるエッセイコーナー